

人間の存在を支えるもの—児童・青少年文学に見る
その1 本質を見抜く眼差し—Cynthia Voigt 著 *Homecoming* における
ダイシーの祖母アビゲイル理解への純粋な希求

稲 田 依 久

**Essentials that Support Human Beings—in Children's
and Juvenile Literature**
No.1 Sincere Interest in a Person—in *Homecoming*
by Cynthia Voigt

Iku Inada

抄 録

かつての結婚生活、家庭生活に絶望し、孤独と他者拒絶のうちに生活する祖母アビゲイルに孫ダイシーが真摯で率直な戦いを挑むことで、アビゲイルが自分自身をとらえなおす機会を得、傷つくことを恐れずに他者を愛することが可能になる過程を概観するなかから人が十全に生きるうえで不可欠な自己発見、自己実現につながる他者の眼差しの意味を問う。

キーワード：児童文学、家族、愛

(2000年9月13日 受理)

Abstract

By analyzing the process of Abigail's regaining her selfconfidence through the relationships with her granddaughter Dicey, this paper discusses the importance of sincere interest in a person.

Key words : children's literature, family, love

(Received September 13, 2000)

I

人間が自然から、社会から、また自分自身から疎外されることが常態のようになってしまった現在、健全な自己認識を築くことの困難さに加えて、人間関係を結びあうことの困難さについては昨今の青少年犯罪の増加や質の変化、愛憎が原因となって生じる殺傷事件を例にとるまでもなく多くの人々の感じているところである。さらには政治、経済の分野のみならず教育の分野においても学校での苛めや学級崩壊などといった倫理観の低さや共感・配慮のなさから個人の尊厳がないがしろにされることで生じる問題の枚挙には暇がない。加えて人々は生活の質の充実と誤解して、日常生活における物質的豊かさを獲得するためにその精神性をないがしろにしがちである。このような現状にあって人が人種や国籍、職種、性別や年齢に関わりなく充実した個として生きるということがどういうことをさすのかを各人がそれぞれに再考する意義は大きい。この故に人生の歩みの初期に出会う書物が呈している「人間の存在を支えるもの」の諸相を検証することで現代への提言とすべく、その第一章をおこすものである。

II

Cynthia Voigt 著 *Homecoming* における孫ダイシーと祖母アビゲイルとの六日にわたる戦い¹ は、二人が同じティラーマン姓であるにも関わらず、しかも性格的には類似点の多い二人 (p.9, p.251, p.297, p.299, p.308) であるにも関わらず、それまで面識も情報も持たなかったが故に全くの未知の他人と同じであり、家族・家庭環境が大いに異なるという背景を有し、それ故に家族・家庭観が、加えて家族・家庭が形成に影響を及ぼすところの自己・社会認識が異なるが故の価値観の葛藤であった。祖母アビゲイルにとってのティラーマン家、即ちアビゲイルの結婚後の家族・家庭生活は既に述べたように「不幸せ」なものであった。² この不幸せな家庭生活はアビゲイル自身にも責任のある結果である。アビゲイルは夫のいいなりで自分の考えを言うことはなかったというのがそれである。この点に関してアビゲイルは家族が不幸せであったことに対する責任を、後悔と反省をもって、子供達が滞在し始めてから六日目に、ダイシーに以下のように語っている。結婚に際して夫を愛し、敬い、夫に従うという誓約をし、それを38年間、守りたくない時ですら黙って従い、夫の言うなりになってきた (p.295) というのである。それは嘘をつくことであり、自分を偽ることであり、戦いたい時にも黙っていることであった (p.295)。夫との結婚による関係を旧来の夫婦関係、即ち夫が家長として一家にまつわるすべての権限を独占して妻や子供達は彼に従う所有物であるかのような家父長制の許での支配・従属関係、とする決意をもって始め、持続したが故に、夫の頑なで独善的な性格に同調できない自分自身を自覚しながらも、誓約をたてた以上は、約束を守ることに人後に落ちないティラーマンの一族 (p.296) として、妻という役割を忠実に演じることを選ぶことこそが結婚生活の本義であると信じようとしたことが不幸せの元凶であったとアビゲイルは正確に知っているのである。彼女は夫とは異なり、かつては子供達を深く愛し、配偶者である夫も愛

していた (p.296) というのに、母親の子供に対する純粋な愛情が、またそのような愛情を抱いている母親としてのアビゲイル自身も、夫に忠実な妻であろうとしたことで否定され、無化されてしまった (p.296) ののである。ここに明らかになってくるアビゲイルの結婚・家庭生活の不幸せは、母親としての子供に対する愛情や妻・母親という家庭内での役割に先行するべきアビゲイルの人間性を、約束は守るべきであるとするアビゲイルの誠実さ故の陥穽というべき硬直した形式主義から、夫に対して忠実である妻という一側面・役割のみに自分自身の存在すべてを集約させた結果であるといえる。ここには女性は結婚すること、妻となることで存在意義を有するかのような、同時に社会的地位を確立するかのような前近代的考え方がみられる。これを文学史的見地から見ると、19世紀初頭のジェイン・オースティンが「分別と多感」や「高慢と偏見」等で描く女性達の結婚観に近いものと言えよう。このような考え方に対してのアンチテーゼとして文学に於いて女性の人間性を主張した作品の一例として挙げられるのは19世紀中葉のイギリスではシャーロット・ブロンテの「ジェイン・エアー」、エミリー・ブロンテの「嵐が丘」、ジョージ・エリオットの「ミドルマーチ」であり、視点は異なるもののアメリカでのナサニエル・ホーソーン「緋文字」、またノルウェイのイブセンの「人形の家」は最も代表的とされている作品である。小説という虚構世界においては既に19世紀中葉に女性が男性・夫とは別の人格として生きる生き方が表現されているのである。しかしながら現実における女性の生き方は20世紀中葉までは前世紀的の価値観に縛られたままであったことは、1963年にアメリカで出版されたベティ・フリーダンの *The Feminine Mystique*、1970年のジャーメン・グリアの *The Female Eunuch* などに代表される女性解放運動を経てはじめて女性の意識革命が社会に広く敷衍し実質化した事実が明らかにしているといえよう。さすれば *Homecoming* でのアビゲイルが上記のような結婚観・妻像を抱いたのも無理からぬことといえよう。アビゲイルが結婚した時期は、彼女の年齢が60歳であり、次男がベトナム戦争で戦死しているという物語の設定や1983年の出版であることなどから考えて1940年前後の出来事であると推察されるからである。しかしながらアビゲイルが自身で選択し、自らに課した妻としての役割が、本来なら夫や子供達との日常生活が自己実現につながる継続的機会であるべきところが皮肉にも自己否定、自己犠牲、ひいては子供達までも犠牲にする「不幸せ」な家庭を作る元凶となってしまったのである。しかも他者を受け入れたり慮ることのない横暴な夫にとっては好都合な従順な妻でしかなかったアビゲイルは自分が選び、約束した誓約のゆえに自己疎外という絶望を生きるしかなかったのである。これはキールケゴールのいうところの「死に至る病」であり、ベティ・フリーダンのいうところの虚ろで不完全で自分が存在していないかのような「名付けがたい問題」(p.16) である。アビゲイルは自らの絶望を解消する生き方を選ぶことなく、夫への忠誠を守り続け、四年前の夫の死によって結婚の誓約が解消する時点まで絶望の内に生き続けたのである。

このアビゲイルの生き方は結婚して初めて生じたものではないようである。アビゲイルは幼少時からいわゆる幸せな子供ではなかったようなのである。この点に関してはアビゲイルの幼い頃の写真をユースの家で見たダイシーが、アビゲイルの両親と姉のシラはカ

メラの方を見て微笑んでいるのにアビゲイルだけは不機嫌な表情でケーキを睨み付け、手は体の後ろに回していたが屹度拳を握りしめていたに違いないと思われるような様子であった (p.136) と説明している。このアビゲイルの育った家庭についての記述はあまりないのであるが、アビゲイルの姉シラの娘ユニスは母親の実家には行ったことが無く、シラ自身も行きたいとは思わないところであった (p.143) というからには、シラとアビゲイルの姉妹にとってあまり幸せな家庭ではなかったと思われる。このように幼少時にして既に、対象は定かでないものの、何ものかに対する怒りを内包していたアビゲイルは、その人生を振り返って人生の殆どを怒って過ごして来たと言懐する (p.297)。結婚後、アビゲイルが抱いた怒りは既に述べたように、夫への忠誠のために自分自身を欺いているという自己欺瞞、自分らしく生きていないという不満が絶望となってもたらず自己に対する怒りであった。この怒りを抑えようとしてアビゲイルは窒息しそうになっていたのに、その怒りは漏れだして、誰もアビゲイルに直接何も言わなかったが、皆の知るところとなっていた (p.297) ということも知っていたのである。その怒りが彼女の三人の子供達のうちの二人、ジョンとライザを追い出した (p.295) と自覚している。ことに後に四人の子供達の母親になったライザは優しい娘でアビゲイルを気の毒に思って彼女のために家に残っていたというのにライザが結婚相手のことで父親と諍いをするようになった時に、アビゲイルはライザの結婚相手のフランシスを気に入っていた (p.240) にも関わらず、一人の女性として一個人である前に、また母である前に、妻であることを選んでいたが故に娘であるライザの幸せを願いながらも娘を支援することなく夫の側についてしまった (p.296) ことから結果的には家を追い出してしまうことになったというのである。しかもアビゲイルの夫はダイナミックな現実を直視して対処することなく、書物は変化しないが故に彼には好ましく、書物の世界に埋没することで自分の回りに壁を築くような人間 (p.276) で独善的であった (p.297) がために、自分達の子供達の離反の理由は言うまでもなく、自分自身の意見を曲げてまでも夫のやりかたを支持したアビゲイルの苦悩を理解することも、アビゲイルの支持が結果的に意味するところの夫婦間の誓約に共感を抱くこともなかったのである。そして残りの一人、第二子である次男のサミーは実際はベトナム戦争で戦死したのであるが、アビゲイルは他の二人同様、彼も両親から離れたくて出ていったのであるから彼を殺したようなものと自覚しており、サミーを死に至らしめたことはひどく辛いことだというのである (p.297)。事実彼女はサミーの戦死の報を電話で受けた後、その電話機を取り外して電話会社まで持って行って窓から中へ放り込むほどにサミーの死を悲しみ、その理不尽な死をもたらず遠因となった彼女自身のありかたに怒りをおぼえたのである (p.241, p.286)。このようにして子供達は母親であるアビゲイルの許を去ってしまうことで彼女を辱め、子供達にそうさせてしまうような生き方をしたことでアビゲイルは自分自身を辱めた (p.297) と、彼女の結婚・家庭生活が自分自身を偽った生き方であったが故に失敗したことを十分に認識しているのである。この認識は十全であり、正当なものであるが残念なことに彼女の次男の戦死、長男と長女の離反がもたらす家庭崩壊を自己欺瞞という絶望の内に甘んじて受け続けた結果、取り返すことの出来

ない過去の事実に関してのものでしかないのである。それ故にアビゲイルの家庭観は痛ましいまでに悲観的である。前庭にあるカジノキが針金で巻いてあるのをみつけたダイシーがその理由を訊ねた折、アビゲイルはカジノキは高い枝をはり、葉を多くつけるのでその重みで木が裂けてしまうのだと説明し、家族も同じだ (p.257) というのである。のびた枝である子供達が幹である家族・家庭をこわしてしまうというのである。アビゲイルは彼女自身が家庭・家族にとってカジノキを補強している針金と同じ役割を果たし得たことを知っているが故に、家庭崩壊の傷はアビゲイルの中で深いものであり、責任を感じ (p.297) 続けている。

このように幼少時から家庭の幸せを味わえないまま不機嫌と怒りに満ち、結婚後は夫への忠誠のために自分自身を裏切り続けることで絶望し、夫を殺そうとまで思い詰めた (p.297) ほどの怒りを夫に対して抱き、さらには自分自身に対して怒りを感じ続けたアビゲイルではあるが、夫の死後は「老いて、孤独で、頭がおかしい」 (p.248) と見えようとも実のところは「幸せ」 (p.248) であり、「今は自分自身の人生を生きている。これを手に入れるのには苦勞した。だから手放したくない。嘘はつかない、自分を偽らない、戦いたい時に黙って控えていることもしない」 (p.295) という自分自身に正直な生き方をすることで、自分のために生きるという内的喜びを恐らくは生まれて初めて味わっていると思われる。これはアビゲイルにとっては人生における大いなる進歩、進展であると言えよう。しかしながらこの生き方には人間として十全に生きているとは言えない部分が残る。それは社会性の欠如である。他者と隔絶した生活を送っている自分自身をアビゲイルは「今はただ頭がおかしいだけで、これは進歩なの。頭がおかしいというのもあたらない。風変わりなの」 (p.297) と分析する。これは60歳の寡婦であり、三人の子供に去られてしまった孤独で不幸な家庭生活を経た意固地な女性の自分自身に対するせめてもの矜持とでもいえるべき生き方である。加えてかつて営んだ家庭が崩壊した責任は自分にあるとして、「もう家族はいらない。また失敗してしまわないように」 (p.297) という決意を抱いているのである。この家庭・家族否定、他者拒絶はしかしながらアビゲイルの本意ではない。かつての結婚生活に於ける自己否定、自己欺瞞が家庭を崩壊させてしまったという過去の失敗への反省と後悔とがアビゲイルを自虐的なまでに他者を拒絶した孤独を選ばせ、臆病にし、その臆病さを隠すために強さを装って他者に挑戦的な態度をとらせ、家庭・家族に対して消極的な態度をとらせているだけなのである。アビゲイルのこの内的二律背反性は近隣の住民や見知らぬ他者には見破られることなく、彼女の意図通りの効果をあげ、アビゲイルは愛人とされ (p.137)、親しい関わりを持たれることなくをそっとされて (p.241) いる。これはアビゲイルが望んだ生き方に即した対応のされかたであり、彼女の自己を偽らない生き方による自己実現を妨げるところのものではない。しかしダイシーだけはアビゲイルの内的矛盾を鋭く看破し、出会って二日目の早朝に人の外側と内側は違うものだ (p.267) という認識にたつて祖母であるアビゲイルの内側、本当の姿はどのようなものかと思いを巡らせるのである (p.267)。これはダイシーが訪ねて行った時にアビゲイルは居留守をつかえたにも関わらず対応するために出てきたこと、夕食のテーブルで子供達

のこと、母親ライザのことをいろいろ尋ねたこと、ティラーマンを名乗っているダイシー達四人には家にいてほしくないと言って追い出そうとしたアビゲイル本人がティラーマン姓であることから、それならアビゲイル本人も家にいられないことになることにダイシーは思い当たり、アビゲイルが本当に四人の孫達を追い出そうとしているのかどうか疑問を抱いたことに起因している (p.267)。そしてダイシーが初日にアビゲイルの家で住みたいと思った時にアビゲイルがダイシーに「あなたの考えていることは手に取るように分かる」(p.250, p.261)と言ったことを思い出して、アビゲイルも同じことを、四人の子供達と一緒に住みたいと思ったに違いないと推察し (p.267)、祖母であるアビゲイルの矛盾した言動の奥にある真意を探ろうとするのである。このダイシーの積極的関わりへの意志が、それはアビゲイルの為ではなくダイシー自身と三人の弟妹の為であり、彼等が望む生き方、即ち四人一緒に自分達のためにいいと思える生活を営むことができる場所がほしいという願望の故であったにもせよ、アビゲイルという人間の本質を知りたいという純粋な気持ちからの関わりへの希求であり、その純粋な思いがアビゲイルの頑なな他者拒絶をときほぐしていくことになるのである。しかもここには母親の母親であるという血縁ゆえの関係への甘えはない。既に述べたようにアビゲイルと四人の子供達とは面識も文通もなく、全くの未知の他人同様であり、唯一の共通項であるライザもアビゲイルにとってはかつての21歳の娘であり、四人の子供達にとっては未婚のままに苦しい生活のなかで自分達を育ててくれた結果、精神に異常をきたした36歳の母親という全く異なる役割をもった女性でしかないのである。それ故にダイシーがアビゲイルに対して抱いた彼女の本質を知りたいという気持ちは、一人の人間をその外面ではなく内側を理解したいという人間関係における本然的な希求であった。この純粋さが不機嫌と怒りに満ちた60歳の女性、38年間の不幸な結婚・家庭生活、四年あまりの寡婦生活を経て心の平穏を得るためには他者を拒絶して孤独であることしかないとの結論に達した人間の心に隠されていた純粋な素直さに触れ、アビゲイルに再度、人間らしい生き方、即ち自分のためにだけではなく誰かのため、一人でではなく誰かと共に生きるという社会性を求める気持ちをもたらすことになるのである。

しかしながら自分自身の心の反映であるかのような荒廃した家と土地に住み、孤独であることを自ら選び、自分のことを頭がおかしいのだと言うアビゲイルが自分自身の殻から出る決心をするのは容易ではなかった。アビゲイルがまず第一に克服すべきは自己受容を妨げている自己矛盾、自己撞着である。孤独でいることで、他者を排除することで、他者を拒絶することで、心の平安を得ようとする自己防衛手段が、実は彼女の目指す自己実現にとって有効な手段ではないと正直に認める必要があったのである。どのように頑迷に他者を排除しようとしても、アビゲイルの内面では結婚生活の間中抑圧していた彼女が本来有していた人間的な感受性が、愛情が、生き続けているのであり、これはダイシーとのやりとりのなかで随所に見られる。先ず一つにはアビゲイルとダイシーが初めて会った時に、孫であることをユニスからの手紙で知っていたにも関わらずダイシーのことを知らぬふりをした一方で、すぐにダイシーを娘ライザの娘であると認め、一人でやって来たダイシー

に三人の弟妹の所在を尋ね、血族の一員であると表明し、泊まる場所もないことも知っていてダイシーが泊めてもらいたがっているを察知して、行き所がないのだから泊まればいいと (p.250) アビゲイルは彼女自身の選択、決断であることを表明するのを巧妙に避けながらダイシー達に対する配慮をみせる。これはそれまでの旅の途上でダイシー達が受けてきた窮境にある子供への憐憫や同情からの好意によると同様の人間としての側隠の情からの配慮、行為である。しかしアビゲイルの場合には、他者を拒絶してでも自分の思い通りの生き方を選ぶという決意をして四年間余も生活してきているという背景があり、彼女のダイシー達への配慮はアビゲイル本人が理性の上でどれほど拒絶、否定しようともその奥には愛していた娘の子供であるという血のつながりを本能的に受容しての行為であるといえよう。ここにアビゲイル本人にとっては無意識裡に自分自身の決意への裏切り行為ともいえる彼女の本来性、即ち家族を愛さずにはいられない人間性の発露がみられる。続いてはアビゲイルのこの素直でない対応が気に入らないダイシーが怒りを感じてアビゲイルを睨みつけるとアビゲイルもダイシーを睨み付け、互いに一步も譲らないでいた時、アビゲイルが短く笑って「私達は似た者同士だ」(p.251) と言って折れる。ここでは祖母としてのアビゲイルが孫であるダイシーの中に自分の性格が継承されていることを確かに認めている。がこれは理性的認識の範囲であって、感情で受け入れているのではない。そうするにはあまりにもアビゲイルの過去の家族にまつわる失敗の痛手が大きすぎるのだと思われる。同様の例はダイシーが弟妹を7マイル離れたクリスフィールドの船溜まりにおいてきたと知るとアビゲイルは所有している舟で迎えに行こうとする (p.251)。この時、ダイシーが弟妹には優しくしてやってほしいものだったその気持ちをアビゲイルは敏感に察知する。ダイシーはその思いを言葉にしては表明していないというののである。これはアビゲイルが自分の言動がどのようなものであるか、即ち一般的な意味での人間関係に当然あるべき礼儀や配慮、約束事を一切無視して、むしろ相手を親密な関係から排除するようなあけすけさや無神経さを装い、相手の好意や礼儀正しさを否定することで相手の存在自体を窮地に追い込むような非道いものであるということを十分に承知していることを証明しているのである。しかしアビゲイルは対人関係における彼女の非常識ともみえる姿勢を、「弟や妹に優しくしてやってほしいのかい?・・・約束はしないよ」(p.251)と崩そうとはしない。これは一見ダイシーの願いを拒絶したかのようにみえる。が実際にはアビゲイルが長年にわたって自分のなかで抑圧してきた愛情や優しさをすぐには素直に表現しないと決意していることの表明であり、厳密には表現することを恐れていることを自覚したうえでの予防線であるといえる。また五日目には何処に行くとも言わずに一時間以上も出かけたままのサミーに気づいており、サミーが戻って来た時にはアビゲイルがサミーにお説教をして「お姉ちゃんが心配していた」(p.283) と言うことでアビゲイル自身の気持ちも表現したと思われる。しかしサミーが「あんたは心配しなかったんだろ」と切り返すと黙って彼の言葉を肯定する (p.283)。この種の例はダイシー達との生活の六日目まで多く見られる。³ そしてアビゲイルのこの自己矛盾は滞在二日目にはダイシーに「どうしたいのかわかっていないだけ」(p.267)、「一人ぼっちになりたいだけ」(p.267)

なのかもしれないと映り、滞在六日目には「出て行くようにと言われているの。でも追い出されずにいるの」とダイシーが訪ねてきたサーカス団のウイルとクレアに説明するように、ダイシーにはアビゲイルの不決断として明らかになっている。加えてウイルもアビゲイルと話した後に「君達は大丈夫。お婆さんがどうするかは僕には分からない——お婆さん自身にも分っていないと思うよ」(p.288)とダイシーに言うように、アビゲイルの揺れ動いている思いは誰の目にも明らかになっているのである。

アビゲイルが克服すべき第二点は、自己主張と自己正当化である。彼女の目指す自己実現、即ち自分の思う通りに生きたいという願望の実行、に有効であるとアビゲイルが信じた手段である他者拒絶を、加えて他者のアビゲイル拒絶回避を、命令口調と断定による自己主張と自己正当化によって為そうとした点である。これも上述の自己矛盾の例と同様、ダイシー達が滞在し始めた初期の段階である五日目までの間に多く見られる。⁴ 本来ならば何か頼み事をする場合、依頼を表す丁寧表現である“please”や疑問文の形をとって「綱を巻き上げて頂戴」、「ジェームズとサミーに言ってもらおうかしら」と言うべきところを、「巻き上げて」(p.252)、「ジェームズとサミーが行くように」(p.256)と相手に有無を言わさないような高飛車な命令口調でアビゲイルの優位を示そうとするのがそれである。また「家族はいるのだろうか?」、「私の作ったスパゲッティは気に入ったかい」と質問するかたちで確かめるべきところを「家族はいる」(p.246)、「私の作ったスパゲッティは気に入った」(p.247)と平叙文で断定することで相手に否定的な返答をさせないようにするのである。これはアビゲイルが夫の死後、自分の気持ちに素直に正直に生きたい、誰にも自分の生き方を邪魔させまいとしてきた意志の表現であると思われる。そしてこの自己主張、自己正当化が意味している他者拒絶を頑なに守ろうとしてダイシー達四人を孫として受け入れようとしめないアビゲイルの存在はダイシーにとって戦うべき「敵」であり、弟妹や母親ライザをめぐるダイシーとアビゲイルとの意見の衝突の数々、加えてダイシー達を家におくことをアビゲイルが望んでいることを認めようとしめない場面の数々はダイシーにとって「戦場」なのである(p.265, p.274, p.275, p.284, p.289, p.292, p.297)。このようにアビゲイルはダイシー達を受け入れまいとするのであるが、生活を共にし、ダイシー達四人がスイカズラの茂みを刈り込み、納屋の手入れをしたり、野菜の収穫や瓶詰めを手伝ったりするのを見ているうちに、アビゲイルの心に変化が生じてきていることが彼女の話しぶりにも現れてくる。滞在五日目になるとそれまでの命令文や平叙文による断定から、付加疑問文や平叙文ではあるが助動詞の使用による相手への譲歩がみられるようになるのである。滞在初期ならば「サミーは躑なれば」と言ったであろうところを「躑がいるね」(p.282)とダイシーに同意を求め、「手伝って」と命令したであろうところを「手伝いがいるわ」(p.280)と、まだ断定的ではあるが緩和された表現をとっているのがそれである。⁵ダイシーがこれらのアビゲイルの変化に気づいたかどうかは物語では明らかにされていない。が滞在六日目にジェームズが「(アビゲイルは)悪い人じゃないよ」(p.289)と言ったことに対してダイシーが「(アビゲイルと)戦っていると思っているし彼女も反撃していると思っている。何がおきているか二人とも分かっているのに

お互いにそのことには触れずにいる。これは面白いの」(p.289)と状況を正確に把握していることを表明し、加えてアビゲイルに関して「好きになれるかもしれない。変だし怒りっぽいけど。・・・いい敵よ。・・・だからいい友達になれるかもしれない」(p.289)とアビゲイルの本質にふれた発言をしている。この点から考えるとダイシーはアビゲイルの言葉の表現のうえでの変化自体を越えてアビゲイルを理解し始めているといえよう。

上記の二点、自己矛盾を抱きながらも孤独な他者拒絶で心の平安を手に入れようと決意し、他者を排除するための自己主張を貫こうとしたアビゲイルではあるが彼女の意志とは裏腹にダイシー達に接する態度にはある種の優柔不断さがみられる。他者拒絶に徹するならば即座に否定的な返答が可能な場面で、アビゲイルは沈黙することで態度表明の保留、返答回避をしているのである。⁶これはアビゲイルが心底から他者を、孫達を拒絶したいのではないことを物語っているといえよう。事実、六日目の夜遅くにダイシーと話しをしたアビゲイルは彼女の孤独希求、他者拒絶の拠るところは過去の家庭にまつわる失敗の故であると語る (p.297)。結婚が夫に対する忠誠、服従を意味すると信じたがゆえに子供達が自分達の生き方を選んだ時に支援してやれなかったこと、そしてその故に子供達が家を去って家庭が崩壊したこと、これらがすべてアビゲイルの責任であると深く反省しているがゆえに「同じ失敗は繰り返したくない」(p.297)というのである。とするならばアビゲイルの本意は、また彼女の本質は拒絶ではなく、むしろ受容であり、愛することであり、責任を負うことにあるのだといえる。このアビゲイルの本質は彼女がみせる笑いが証明している。⁷サミーを見てのアビゲイルの笑いは、過去の家庭、子供達を、家族を愛していたアビゲイルの我知らずのうちの再出現であり、その微笑みにアビゲイルは自分自身を取り戻してしていることを窺わせるものである (p.273, p.279)。また次男の死と電話機の話をしての微笑みは、過去の家庭が失敗に終わったことでもう二度と誰も愛すまいとするアビゲイル自身を客観的に見ての自嘲であると思われる (p.286)。そしてダイシーとの激しいやりとりの後に見せる笑いはダイシーとアビゲイル自身との類似を見出しての血族の絆の確認であるといえる (p.251, p.262, p.294)。しかもダイシーがアビゲイルと一緒に生活したいと思っていることを察知した折には、そうならばいいがそうでできないという思いから「微笑みとも心の痛みともとれるような表情」(p.262)を見せ、またサーカス団長のウイルの許に行くつもりかと尋ねる前にも、去られることを恐れまいとするかのように突然の微笑みを見せているのである。こうしてみるとアビゲイルが四人の孫達を受け入れようとしないのは、自分が傷つくことを恐れているというよりは、むしろ再度失敗したくないと彼女自身が表明しているように、アビゲイルが愛することでその愛する対象を傷つけることを恐れているかのようなようである。もう一度家族を愛することが可能になる機会を目の前にしてアビゲイルの心は、彼女の当初の決意を裏切って、揺れ動いているのである。この揺れが孫達への積極的関与に大きく振れたことを示す出来事が五日目に起きる。それまではメイベスが知恵遅れであると決めつけて、直接メイベスに話そうともしなかったアビゲイルだったのであるが、メイベスが右腕の腱鞘炎の痛みを我慢していたことを知った折に、それまでは関わることを恐れて無関心を装って抑制してきた祖母としての

愛情が自然な形でメイバスに向けて表出されるのである。⁸ここに至ってアビゲイルの自己矛盾、自己正当化、態度保留が彼女の内に於いてのみならず孫達に向けても瓦解するのである。更に六日目には二度までも出かける先を言わずに出かけてしまったサミーを心配しての余り、それまでは羨などに関わる様子を見せなかったアビゲイルが、ダイシーをさしおいて思わずサミーに対して夕食抜きで寝るようにと命じてしまう (p.290)。これはアビゲイルが「ここはあなた達ではなく私の家なのだから」(p.292)と説明をするが、アビゲイルが積極的に直接に孫の存在に関わったもう一つの例である。

アビゲイルをその本然に立ち戻らせたのは上述のように四人の孫達の出現である。特にアビゲイルとの性格的類似性を持ち合わせている長女ダイシーが鋭くアビゲイルの自己矛盾に気づくことでその矛盾の奥にあるアビゲイルの本心を知りたいという純粋な人間の興味をアビゲイルに対して抱いたことがアビゲイル自身に彼女の本質を知らせることとなるのである。ダイシーには勿論彼女達四人の子供達が住む家が、保護者が必要であり、そのために祖母であるアビゲイルを説得して四人を受け入れてもらいたいという強い願望があった。ダイシーが自分達四人が有用であることを証明すればアビゲイルは家に置いてくれるだろうと考えて家回りを整える様子を見ながらもダイシー達に心ならずも厳しい態度と口調で接してきたアビゲイルは、ダイシーが三人の弟妹を愛し、彼女なりのやり方で弟妹を躱げ、守るのを十全に理解していたのである。この理性的理解をアビゲイル自身の本質に関わる他者への関与、愛情へと質的変換を遂げさせたのは、ダイシーが一途に弟妹を愛すると同様にアビゲイルに対して説得という「戦い」を挑むことで正面から向き合い、アビゲイルという一人の人格を理解したいと切望したという事実である。真剣に、誠実に、隠すところなく自分自身をさらけ出し、アビゲイルの言動と本心とのずれを察知しようと理性と感性のすべてを駆使してアビゲイルと戦うダイシーと向き合うことで、アビゲイルは自分自身を直視せずにはいられなくなったのである。そこでアビゲイルが再発見したのは、孫達を自分の生活に直接関わる者として彼等の生活に巻き込まれることを、同時に自分の生活に巻き込むことを無意識裡に為している自分であったのである。こうして娘の子供達を「好き」(p.298)だと認めて孫達を愛さずにはいられない自分を受け入れたアビゲイルをダイシーは「きれいだ」(p.294)と評価するのである。さらにダイシーは、過去に家庭を崩壊させた責任を感じ続けているアビゲイルに、母親であるアビゲイルの気持ちをくんで家に残って彼女と共に生活しようとした優しいライザを母親に持っているが故に家族、家庭に関してアビゲイルにかつてと同じ失敗をさせはしないと保証することで (p.297) アビゲイルに希望を与えすらすらするのである。このようにして孫達によって本来の自分を取り戻し、励まされるアビゲイルを象徴するかのように、孫達が来るまでは「顧みられていない」(p.244)、「ひどいことになっている」(p.254) 畑も納屋も手入れされていくのである。

このようにして娘ライザが21歳で出奔して以来15年間音信不通であったのが思いがけず彼女の子供達が突然出現したことが⁹、60歳のアビゲイルの人生を、彼女が想定した隠遁生活とは180度の対極にある、孫達と共に生活するという九日間の共同生活へと転換させた

のである。この共同生活は更に発展して九日目にはアビゲイルが孫達と家庭を再度営もうという生産的な決心をする結末をもたらすのである。アビゲイルの決意の拠るところは彼女の言によれば「意地ははらない。あなたたちには負けたわ」(p.312)という敗北宣言である。この宣言はダイシーが滞在当初からアビゲイルと戦っていると感じていた実にその戦い、即ち言動と真意とが矛盾しているアビゲイル、自分自身を偽わっているアビゲイルの真意を知る戦い、に於いてアビゲイルが敗北したことを認めたのである。言い換えればアビゲイルは率直に、自分の真意に素直に生きようと、自己同一性を得たことを宣言したのであり、これはダイシーとの戦いには敗れたといわねばならないのであるが、アビゲイル自身が60年間戦ってきた自分自身との戦いによりやく打ち勝った勝利宣言であるといえよう。かつて家庭を崩壊させたという挫折感と子供達と自分自身を不幸にしたという罪悪感から自由になれなかったアビゲイルの心を最初に溶かしたのはダイシーのアビゲイルに対する率直で純粋な人間的興味であったのだが、加えて四人の孫達がアビゲイルの過去や現在の生活ぶりに対して一般社会通念がもたらす先入観をもたずに素直で率直な目でありのままのアビゲイルを見ることがアビゲイル自身に自信を回復させるのである。例えば、四人の孫達を地元の学校に通わせる手続きのために町へ出かける朝、いつもはクシャクシャの髪をきれいにとかし、口紅をつけ、いつもの裸足にダブダブのブラウス、長いスカートではなくストッキングに靴を履き、スーツを着込んだアビゲイルを見てダイシーが、「おめかししたのね」(p.302)と変化を評価し、サミーが「裸足でかまわないのに」(p.302)といつものアビゲイルを受け入れていることを示し、メイバスまでが「いつもと違うのね。綺麗」(p.302)とほめるのである。実際にはとかした髪はまたすぐクシャクシャになり、スーツは古いものである(p.302)にも関わらず、アビゲイルが孫達のために町に出かけることを大切に思っのお洒落をアビゲイルの気持ちにそって評価するのである。またアビゲイルが土地や家、預金にまで税金を払っていることを初めて知ったダイシーとジェームズが自分達はいられないにしてもアビゲイルには今の家、農場で生活してもらいたいとアビゲイルのことを純粋に心配していることを表明し、彼女の経済生活を助けるために農場の活用法をいろいろ提案する(p.304-p.305)。このことがそれまで福祉の世話にはならないとプライド高く生きてきたアビゲイルに孫達のための経費を初めて公の援助に頼ろうという気持ち(p.308-p.309)にさせる。ここに至ってアビゲイルの気持ちに最終的な変化が生じ、その表現が滞在初日のサミーの質問「なんて呼べばいいの」に対する八日後の返答となる。アビゲイルが自発的にサミーに対して「おばあちゃんと呼んで」(p.310)と言うのである。続いてアビゲイルはダイシーが「一緒に住まわせて」(P.312)と言ったのに対して「それでいいのかい？」(P.312)と問いかけるのである。滞在初期には命令文と平叙文のみで自分の意志を通そうとしたアビゲイルがダイシーの気持ちを先ず第一に考えていることを表明するのである。これらがすべて先のアビゲイルの敗北—勝利宣言とつながっているのである。

III

以上に概観したようにアビゲイルの結婚生活は妻であるアビゲイルの夫への忠誠と服従という傍目には円満に見えるものでありながら、内実においてはアビゲイルの自己犠牲によって成り立っていた。そしてこの38年間の長きに渡る結婚生活でアビゲイルが味わってきた自己欺瞞、自己犠牲、そしてそれらがもたらす失望、絶望からの自己救済法として夫の死後四年間に渡って彼女が選んだのは孤独、他者拒絶という逃避的手段であった。が、それが結局は彼女の本質と相容れないことを明白にしたのは皮肉にも彼女が過去の家族関係の失敗から最も避けたいと願ってきた親族である孫達との関係であった。ここには理解のない父親と父権の強固さによって崩壊した家庭の例、加えて崩壊家庭の責任を一身に背負って自らに罰を課そうとしているかのような母親アビゲイルの姿がある。アビゲイルの立場からみれば夫婦と三人の子供達との円満で親密な家庭こそが理想であったのだと思われる。しかしながら社会学者ロバート・ベラーによれば一般的にアメリカの家庭では「家族の連続性を肯定的に受け取る土壌がない」⁹ のであり、「大人に対する子供の依存が、異常なものと受け取られる」¹⁰ というのであれば、成年に達した子供達出奔に対してのアビゲイルの責任感や敗北感は無用のものであると言っても差し支えないと思われる。確かにアビゲイルの子供達が家を出て行った折に感じた思いは建設的な自己実現を希求するというよりは、父親から、また父親に追隨するばかりの母親から自由になりたいという逃避的理由からであったかもしれない。がそれでも子供達はそれぞれに自分の生き方を選んだのであるからその一事に関しては当然の結果であったと言って良いと思われる。むしろもっと根源的な問題とすべき点はアビゲイルと夫との関係であろう。親子関係、兄弟姉妹の関係が派生してくる家族・家庭を構成する最も基本的な単位は夫婦関係である。¹¹この最も基本にある夫婦の関係においてアビゲイルと彼女の夫との間には人格的理解も感情的融和もなかったというのである。家族の定義の一つに「感情的融合を結合の紐帯としていること」¹² という一項が見受けられるが実にこの最も基本的な基盤に於いてアビゲイルは家族・家庭を築く要素を欠いていたのである。このことは、アビゲイルにとっては「感情的融合」よりも誓約、忠誠という理性分野における結びつきのほうが大切であったという一事と深く関係している。アビゲイル自身が幼少時から不機嫌で怒りに満ちていたという不健全な情緒性を有していたことは既に挙げたが、この幼少時の鬱屈が成人して結婚するに至っても解消されぬままに出会った配偶者が独善的で頑なな男性であり、書物から得た知識や情報を現実に適用することのできない想像力のない人物であったが故に、アビゲイルは情緒面での解放を得ることができないまま、彼女に出来る方法、即ち理性範疇における誓約という形態で婚姻関係を全うしようとするに至ったのである。勿論アビゲイルは夫や子供達を愛したことがあると明言しているのであるが、アビゲイルの愛は夫に対しては一方通行であり、融合と呼べる双方向的運動にはなり得なかったのである。このような夫婦関係は、先の家族の定義に鑑みれば破綻しているといえる。この破綻を補償すべくアビゲイルは彼女が有する感受性を子供達に向けて彼等を十分に理解するのであり、この無償の

行為が彼女の情緒的解放、即ち彼女が子供達を愛する愛情が子供達に率直に伝えられることで子供達に受け入れられ、さらには子供達の無条件の信頼、愛情が得られるという解放、につながるものであったはずだったのである。が、アビゲイルの子供達理解は夫への忠誠という壁に阻まれて子供達に直截には伝わらないままになってしまい、結果的にはアビゲイルを更なる閉塞状態へと陥れてしまうことになったのである。このように見ればアビゲイルにとってのトラウマである家庭崩壊は彼女の夫婦関係の破綻に因しているといえよう。

アビゲイルの挫折感は上記のように根の深いものである。そしてアビゲイルは家族・家庭に対する期待や希望を捨ててしまったのである。がここにアビゲイルとは異なる経緯からではあるが同じく家族・家庭に希望を抱けなくなっているダイシー¹³から、孫ではあるがその血縁ゆえの予備知識や馴れ合いとは無関係の、初めて出会う人間に対する新鮮で純粋な人間的興味からの眼差しを向けられ、意見の対立や衝突という戦いを経て、それぞれが独立した個として出会う体験を生まれて初めて味わうのである。この出会いの課程はエーリッヒ・フロムが「愛するということ」で説いているところの「愛の習練」に必要な「規律」、「集中」、「忍耐」、「関心」(p.160-164)の要素を奇も備えるものである。且つアビゲイルが自分自身のなかの愛する可能性を信じ、愛する対象である孫達の可能性も信じ、更には自分の愛が信頼に足ると自分自身が信じられるまでに孫達がアビゲイルに真摯に関わってくれるという、これもフロムのいう「信頼と勇気」(p.182-p.191)、「愛の能動的性質」(p.46-p.64)に則る行為である。このように家族・家庭に対する希望的幻想を持ってなくなり、自己疎外から他者を受け入れられなくなり、自ら社会に背を向けていたアビゲイルは、利害を越えて全くの白紙からの人間関係を求めたダイシーによって自分自身の人間としての存在の意味を自己同一性を見出すことで確信し、ダイシーをはじめとする四人の孫達との共同生活によって孤独な独居生活では体験できない豊かな感情を自分自身の内に再発見するのである。ここには人間が社会的存在として生きるうえで欠くことのできない他者との交わりの意義、また他者の真剣で誠実な眼差し、即ち愛の意義が力強く描かれている。

注

- 1 ダイシーとアビゲイルとの葛藤については拙稿「児童文学に見る価値観の相違が児童にもたらす教育的効果その2」を参照されたい
- 2 同上
- 3 アビゲイルが彼女の四人の孫達と出会った第一日には以下の事例がある。
 - ・ダイシーと一緒に昼食をとりたい気持ちを素直に表現できずにあたかもダイシーが厚かましく昼食を無心したかのようにダイシーの所為にして昼食の用意をする (p.247)
 - ・すぐにも立ち去るようとダイシーに言いながら本当のところはダイシーともう少しいたい気持ちを昼食の後かたづけもしないと非難することで表現する (p.248)
 - ・サミーがアビゲイルに「あなたが僕たちのおばあちゃんなの？」と問いかけた時には頷いて答えながら、続いて「なんて呼べばいいの？」という問いは聞こえないふりをして無視する (p.253)

- ・ダイシーがメイベスとトマトの収穫をするアビゲイルを手伝おうとすると助けはいらないとばかりの返事をする (p.259)
- ・メイベスに知的障害があるという誤った情報をユニスからの手紙で受け取っているアビゲイルはメイベスが本当にそうであることを実際に知ることを恐れているかのように決して直接メイベスに話そうとはしない (p.256, p.259, p.273, p.279) その一方でメイベス自身に「知的障害がないなら自分の意見を言い、返事ができるだろう」と迫る (p.264)
- ・ダイシーが納屋で見つけたヨットについて誰のものかと質問すると、ダイシーの問うた意味、即ちアビゲイルの三人の子供達のうちの誰のものであったか、を理解しながらも所有権についての問いであるかのように「私のもの」と答えてダイシーがアビゲイルの家や生活と無関係であることを思い知らせようとする (p.261)
- ・ダイシーが四人で船着き場に行きたいと言うと、孫達に万が一の事があってはいけないという心配から末子のサミーは泳げるのかと尋ねる配慮があるにも関わらず、四人とも泳げるというダイシーの答えに「好きにすればいい」と素気ない返事をする (p.265)

第二日には以下の事例がある。

- ・スイカズラの茂みを整え始めた四人の仕事ぶりを見ていたにも関わらず、「私はスイカズラが好き」(p.270)と四人のしたことが気に入らないかのような発言をしておきながら続けて「スイカズラには丸一日かかるだろうね」(p.270)「刈り取った蔓は湿地まで持っていっておかないと」(p.270)と四人が更に滞在することを想定しているような口振りでアビゲイルが話す

第四日の事例

- ・「明日は発つのかい」(p.276)とダイシーに尋ねながら、ダイシーが翌日の仕事の予定を話すに出ていくようにとは言わずにいる

第五日の事例

- ・夜半からの嵐で朝も雨が降っており、外回りの仕事を予定通りにすることができないことからアビゲイルが出て行けと言うのではないかとダイシーが恐れていると、「手伝ってもらいたいことがある」(p.278)とアビゲイルからきりだす

4 命令形の使用例は以下の通りである

依頼文であるべきところが命令文である事例

- 第一日 「巻き上げて」(p.252)
「船着き場につかまって」(p.254)
「ジェームズとサミーが行くように」(p.256)
「じゃがいもは籠にいれないよう。流しに持って行って」(p.261)
「あなたは邪魔しないで」(p.264)
- 第二日 「玄関先は片付けて」(p.273)
- 第五日 「モップでふき取って」(p.279)
「答えて」(p.279)

ねぎらいの言葉があるべきところが命令文のみである事例

- 第二日 「手を洗って」(p.269)

譲歩もしくは相手への説明があるべきところが命令文のみである事例

- 第二日 「それぞれが自分の(ベッドを)整えて」(p.268)
- 第五日 「(出て行くのは)今日でなくていい」(p.299)

質問であるべきところが平叙文で表現されている事例

- 第一日 「家族はいる」(p.246)
「私の作ったスパゲティは気に入った」(p.247)
「知ってるだろ」(p.247, p.248)
「聞こえてるだろ」(p.249)
「あそこ(ユニスの家)だろ」(p.250)
「優しくしてほしい。あんたにしたより」(p.251)

- 「メイベスが知恵遅れだから」(p.264)
「どうしてあんなにそんなことが分かる」(P.265)
- 第五日 「お金を稼ぐためにこっそり出かけるのに忙しくてサミーのことはユーニスに言わなかった」(p.282)
- 5 断定、自己主張が緩和されている事例は以下の通りである
平叙文ではあるが助動詞 (can, could) の使用により譲歩が表現されている事例
第五日 「手伝って頂戴」(p.278)
「台所で手伝いがいるわ」(p.280)
付加疑問文にすることで相手の同意を求めるといった譲歩が表現されている事例
第五日 「あの子(サミー)には嫉があるね」(p.282)
第七日 「逃げ回るのはもう十分、じゃないのかい？」(p.299)
- 6 ダイシー達の滞在初日にアビゲイルがみせた沈黙の事例は以下の通りである
・サミーが「あなたがあばあちゃん?・・・なんて呼べばいい？」(p.253)と尋ねた時に聞こえないふりをして返答を避ける
・ライザが四人の子供達を置き去りにしていなくなってしまったことにアビゲイルがふれた時、サミーが「母さんは僕を愛してくれた」と言ったのに続いてダイシーが「母さんは私達みんなを愛してくれた」と母親ライザへの信頼と愛情を表明した時にアビゲイルは「ファン」とのみ答える (p.265)
・四人の孫達がおやすみなさいと挨拶をした時、黙って頷く (p.266)
- 7 アビゲイルの笑い
第一日
・泊まる所があるのなら何故ここに来たのかというアビゲイルの意地悪な質問に意地をはって答えようとしないダイシーと暫くにらみ合いをした後、アビゲイルが声をあげて笑う。そのアビゲイルに対してダイシーは怒れずに態度を和らげる (p.251)
・ダイシーが祖母であるアビゲイルの家、それは十分な広さの家であり、手伝える仕事もあり、湿地の向こうには海もあり、納屋にはヨットもある、そんな家にいたいと思ったダイシーの考えを見透かしたように「あなたの考えていることは聞こえている」と不機嫌で怒ったような目つきで言った後に、滅多に見せないような微笑みとも心の痛みともとれるような表情を見せる (p.262)
第二日
・サミーが全体重をかけてスイカズラの蔓をひっぱった時に、蔓が屋根からはずれて大蛇のようにサミーに巻き付き、サミーが後ろに転がってしまった時、アビゲイルは小さくかすれた声ではあったが声をあげて笑う (p.273)
第五日
・激しい雨の朝、サミーが裸で胡瓜の収穫を手伝った後、犬のように芝生で転がって遊んでいるのを見てアビゲイルが突然眼で微笑む (p.279)
第六日
・サーカス団長のウイルがクレアとアビゲイルの家を訪ね、アビゲイルになぜ電話をひいていないのかと尋ねたのに対してアビゲイルが次男の戦死の報を電話で受けた後に電話会社の窓から電話機を放り込んだ話しをし、ウイルが声をあげて笑った折にアビゲイルが微笑む (p.286)
・サミーのことで諍いをした折に怒鳴ったことを謝った後、サーカス団長のウイルの許に行くつもりかと尋ねる前に突然の微笑みが口元に浮かぶ (p.294)
- 8 メイベスが三日目の朝から右腕の腱鞘炎で痛みを感じていたことを四日目の朝食時に知ったアビゲイルは、初めてメイベスに直接話しかける。「どんな具合？」(p.280) 軟膏を塗り、手首と肘をガーゼで巻いて腕がつれるようにし、「楽かい?・・・数週間は大事にしないとね。つっておけば筋肉への負担が軽くなるから。」(p.280)そしてメイベスの感謝に答えて「もっと早くに言わないとだめ。どうしても我慢しなきゃならない場合以外は我慢しなくてもいいんだから」

(p.280) メイベスがもう良くなることはないかもしれないと心配したと言ったことに対して「臍鞘炎はかなり痛むから」(p.280) と答える

- 9 「英米文学にみる家族像」 p.158-p.159
- 10 同上 p.159
- 11 「現代家族の社会学」 p. 4
- 12 同上 p. 4
- 13 詳細については拙稿「ビルドゥングスロマンとしての *Homecoming* にみる Dicey Tillerman の成長」を参照されたい

参考文献

- Friedan, Betty. *The Feminine Mystique* Dell Publishing Co., Inc. New York : 1973
- Fromm, Erich. 「愛するということ」(鈴木晶訳) 紀伊国屋書店 東京 1997
- 久守和子、高田賢一、中村邦生編著「英米文学にみる家族像」ミネルヴァ書房 東京：1997
- 石川実 編「現代家族の社会学」有斐閣ブックス 東京：1997
- Voigt, Cynthia. *Homecoming* Atheneum New York : 1983